

北海道電 P F B C 拡大見直し

ーを採用した商業設備を苦味厚
真三号機ごとく建設している。
しかし、トラブルが多で発生
したため、商業運転を一年数カ
月遅らせ、九九年三月の運用を
目指して全土を挙げて技術開発
を進めている。予定では苦味厚
真真号を稼働させ、二〇〇二年完
成でRBCを出力三十五万ワ
ットにケールアップした西局機
を建設する計画だった。

苦味厚真は二号（輸入炭の二

PFCはもとより、アスベストも開発。加圧流束ボイルで発生した蒸気・過熱タービンを回し、さらに高温圧力ガスタービンと回す。炉内脱酸設備出るペリットがふるまひで電気が最初に技術導入。現在、九電前田で石川島播磨重工業がABBと提携し、三十三万キロワットの建設中。北海道は三菱重工に発注し、独自の技術で、ガスをクリーンにする。

関係が明らかになると、北海道電力（社長泉盛三）は、苫東厚真火力発電所、新弘根厚真町に新設する四号機、形式と出力の變更を検討しており、三月末に正式決定する。当初予定していた加圧流動炉ボイラのコンパインドサイクル（複合発電（P・F・B・C）による三万五、四設備を断念、微粉炭燃焼による出力七十万、二万発電とする方向に、P・F・B・Cは高効率石炭火力として、北海道は、基礎工業と共同で現在、八万五千、二の商業設備を建設したが、トラブル、運輸開始が大幅に遅れている。このため、二電源としてのスケールアップはすすむと判断した。決定すれば、現在、九州電力、中国電力、電源開発会社が進めているP・F・B・Cの商業化投資にも大きな影響を与えよう。

（三浦一雄説）

トラブル多く変更

苦東厚真4号は微粉炭燃焼

は磯子火力(横浜市・石炭たき)では近く石川島播磨重工業に正
式発注し、日本で初めてのタウ
型ボイラの建設、乗り出すほ
か、貯炭場面積も今より四分
の一に省スペース化、サイロを
命題。それだけに、機器メーカ
業しながら、六十万、二二基の
日分に減らし、その分は千葉に
ある出力差のコールセンター
から輸送する。
ボイラは設備面積を小さくす

出力70万kw

サイロからボイラまでの五百メートルは空気で浮上式コンベヤーを設置する。川崎重工業、石横、住友重機械工業に競争入札させる。環境対策では乾式脱灰装置を採用。同装置では過去最大で、

日本經濟新聞 1977年02月

き下げたのがきっかけで、二十四日は五十六円安と落。二十五日は四円高と反発し、売買高は東証全部で一位だった。「売りの国内外の機関投資家は田雅昭・野村証券投資情報部長」という。

○有力アナリストの
下げに株価が大きく反応したのは、IR（投資家向

日刊工業新聞

97年02月20日

三菱重工のベテラン技術者▶



三菱重工業のベテラン技術者が定年を機に、四月一日付でインターネットを利用したベンチャー企業を設立する。インターネットで約の情報を流す一方、ホームページに釣具店や旅館などの広告を掲載する。初年度の売り上げは一億円が目標。重厚長大企業の技術スタッフがベンチャーで、本社を神戸市に置

は珍しい。

ベンチャー企業を設立するのは神戸造船所の坂井広技師長(57)と写真、東大生産技術研究所(現宇宙科学研究所)を経て六五年に三菱重工に入社、宇宙機器製造技術の開発を手掛けてきた。技師長は副所長と同格のポスト。

新会社の名称はナンバアイで、本社を神戸市に置

定年を機にV.B.設

… 機械は、電機動力で発電効率四〇・六％、二、〇〇二年に運用予定で、その前の年に既設設備の運転を終了させる。電力の供給先である電力会社からは数十％単位の「コストダウン」要求がきており、タスヒを発注する予定の富士機械とも合わせ、機器メーカーとのコストダウンへの交渉では、従来よりはるかに厳しい対応で臨んでいる。

日経産業新聞 7年02月27日



轉機

製造業に携わる者にとって、製品を納め、顧客に満足していただく時が何よりの喜びだ。特に当社は重厚長大の一品受が主体だけに、取引先の反応は設計や製作担当者には直接跳ね返ってくる。他者にもある。生身の人間同士の「信頼」が試されるからだ。

納めた設備、1年動かず

小 目 め こと 池